

GEO STORY 風景から見る地球のものがたり

行者山から見た三崎

ジオパーク 専門員・今井 悟



右の写真は、三崎地区にある行者山から見た春の三崎川周辺の風景です。三崎川とその周辺に広がる水田は、農業が盛んな三崎地区を象徴する存在。この三崎地区で古くから農業を営んでいたのが、下ノ段の人々です。下ノ段集落があるのは、水田よりも5mほど標高が高い台地で、河成段丘という地形だと考えられます。人々は、増水時には浸水してしまうような低地を避け、この段丘を居住地として利用してきました。

三崎地区で農業が盛んになった背景には、地層の存在があります。三崎地区の地層は、竜串海岸などで見られる地層と同じくボロボロになりやすい（風化しやすい）岩石でできています。そのため周囲よりも早く侵食されて窪地をつくり、そこに三崎川が土砂を運び込むことで平地ができました。また風化・侵食作用は、この写真の景色そのものが生まれる要因にもなっています。行者山の南斜面には、三崎断層と呼ばれる断層が走っています。この三崎断層を境に、竜串海岸などで見られるボロボロになりやすい地層と叶崎などで見られる硬いカチカチの地層が接しています。行者山は硬い地層側にあるので、平地の地下にある地盤ほどは削られず、三崎地区を見下ろせる山として残ったのです。

このように、平地が多く水も得やすい恵まれた環境の三崎地区では、農業によって比較的安定した暮らしが営まれてきました。



しかしその一方で、自然災害のリスクを抱えています。その代表が津波です。1854年に起きた安政の南海地震では、高さ5～6mの津波がやってきたとされています。当時の三崎地区の中心街は、現在の国道よりも海側にありました。写真では見にくいのですが、そこは波が打ち上げた砂や石ころがつくる浜堤と呼ばれる微高地となっており、津波の直撃を避けることができたようです。しかし、流路変更以前の三崎川河口にあった集落では、大きな被害が出たとされています。河川の痕跡は、周囲よりも少し低い場所や地盤が軟弱な場所として残っている場合があります。地震や津波の際には注意が必要です。そして1707年の宝永地震の際には、津波の高さは13～14mにも達し、三崎地区全域に甚大な被害をもたらしました。現在の竜串ビジターセンター周辺に暮らしていた当時の住民たちは、この津波被害を受けて、高台へ移住しました。そうしてできたのが平ノ段集落で、下ノ段と同じく河成段丘に築かれています。

ふるさと地球の絶景プロジェクト

新型コロナウイルスの影響で、GWも外に出られない日々が続きました。ジオパーク関係地域では、そんな世界中の人々に、日本各地のジオパークの絶景をお届けする“ふるさと地球の絶景プロジェクト”を展開中です。作業用BGMや一服のお供にいかがでしょうか。お手持ちのパソコンやスマホで“ふるさと地球の絶景”と検索して、動画をお楽しみください。



#ふるさと地球の絶景
#ourplanetearthproject



ものついでに地球観察

絶景だけが大地の遺産ではありません。家の近所の道端にあるちょっとした崖や坂道なんかも、れっきとした地球の一部なのです。

今回紹介するのは、石に空いた穴。ただの穴ではなく、200年以上前に二枚貝が空けた穴です。海岸できれいな穴が空いている石を見つけたことがある方もいるかもしれませんが、それと同じものです。二枚貝の中には、石に穴を空けて、その中で暮らす種類がいます。その穴が地層中に残されると、生き物の暮らしの痕跡である生痕化石の一種ということになります。今は住宅地にある小さな崖ですが、はるか昔、波の打ち寄せる磯が近くにあったことを物語っているのです。



地球に住む以上、私たちは、災害のリスクやウィルスの脅威とは、いつも隣り合わせ。昨日までの日常が遠くになってしまった今、より良い未来のためには、改めて、自然と地球との付き合い方を考える時なのかもしれませんね。